

私の一文字「翔」

地方創生委員会 委員長

東 和浩

りそなホールディングス
取締役会長



「翔ぶ」ために変革する

会員の方が思いを込めて選んだ一字に、書家の岡西佑奈さんが命を吹き込む「私の一文字」。今月は、東和浩地方創生委員会委員長にご登場いただきました。



岡西 お選びくださった「翔」は、部首の「羊」は実は意味にあまり関係なく、羽を広げた鳥が大空を飛ぶ様子を表しています。今回、最後の一画は東さんがこれまでなさってきた「変革」からインスピレーションを受けて、舞い上がるように書かせていただきました。

東 ありがとうございます。「翔」は英語でいえば、FLYに近いのかもしれませんが、今は発想をこれまでとはまったく違う視点で考え、実行に移す。そして、俯瞰して見る。そうしたことが必要な時代だと思っています。

金融機関にはお客さまのさまざまな課題に向き合い、ソリューションを提供していくという仕事がありますが、私たちはお客さまに合わせて変わっていかなくてはなりません。自分たちの会社の論理で仕事をするのではなく、お客さまにどうやって寄り添えるか。それが企業として生きる道だと思いますし、社会に貢献していくためにも不可欠だと思っています。

岡西 2003年の公的資金注入直後、まさに「翔ぶ」ためにさまざまな取り組みをされたと思います。

東 公的資金を完済した時に先輩から贈られた言葉が、中国古典『菜根譚』からの一節「伏すこと久しきは、飛ぶこと必ず高し」でした。私たちは国民の皆さまの巨額なお金によって生かされたわけですから、それに応えていかななくては

けない。私たちのお客さまは中小企業や個人が中心ですので、そういう方々にどのように貢献していくかを一番中心に考え、最初に力を入れたのがデジタル化でした。

残高確認やさまざまな取引ができる「アプリ」を開発しましたが、使いやすさという点では自信を持っています。なぜなら、お客さまの意見を聞いてどんどん改善を図っていくからです。会社の中にいると自分たちの世界に閉じこもりがちです。意外と外を見ていない。革新のためには視野をどうやって広げていくかが重要です。

岡西 何か大きなきっかけがあったのですか。

東 平たく言うと、さまざまな人の意見を聞くということです。公的資金が入った時にりそなグループの会長に就いたのは、JR東日本出身の細谷英二です。彼が最初に言った言葉が「りそなの常識は世間の非常識」でした。そこを変えていくためにはさまざまな人の意見を聞かなくてはいけない。特に、われわれのサービスを利用されているお客さまの意見を聞かなくてはならないと、本当に気付かされました。ポストコロナの今もまさにそういう時代だと思います。

岡西 経済同友会の地方創生委員長として地方が「翔ぶ」ために必要なことは何だとお考えですか。

東 簡単に一言で言えるような話ではないのですが、例えば、デジタル技術の活用です。情報提供一つとっても、今の時代、小さな自治体であってもデジタル技術を活用することで、あまりお金をかけずに住民サービスを充実させることが可能だと思っています。



書家

岡西 佑奈

1985年3月生まれ。23歳で書家として活動を始め、国内外受賞歴多数。